| 書き抜き読書ノート 2065 | 2015 年 4 月 26 日 |
|---|---|

モンゴメリー著・村岡花子訳「アンの青春―赤毛のアン・シリーズ 2 ―」新潮文庫、新潮社 2008 年 2 月 25 日刊を読む

１．「なにを考えているの、アン？」ギルバートは街道に馬車をおいて、小径からきた。

２．アンは夢みるように答えた。「ミス・ラヴェンダーとアーヴィングさんのことを考えていたの。こんなになにもかも、いい具合にいったし･････ながい年月、行き違いから、はなればなれになっていたのが、けっきょく、またいっしょになれたのね。こんな美しいことがあるかしら？」

３．と、見上げたアンの顔を、ギルバートは、しっかり見おろしながら、「そう、ほんとうに美しいことだよ。けれどね、アン、もしもぜんぜん、はなればなれにならず、行き違いなどもなかったら･････もし二人が手に手をたずさえ、共に味わった思い出だけをあとに残しながら、生 涯を送ったとしたらそのほうがいっそう、美しくはなかったろうか？」

４．一 瞬、アンの胸に妙に高鳴り、じっと見つめるギルバートの視線に耐えられないものを初めて感じ、目を伏せてしまった。青白い頬がばっと染まった。ちょうど、心の奥にかかっていた薄絹の覆いがはずされ、思いがけない感情と現実を目にした気持だった。けっきょくロマンスはすばらしい騎士がラッパのひびきも華やかに、自分の生涯にあらわれてくるというようなものではなく、いつのまにか、 昔 ながらの友達が自分の傍を静かに歩いていた、というふうに、忍び寄るものかもしれなかった。見たところは平凡で、散文的だが、不意に、一筋の光線がそのページの上に落ちたとたん、詩と音楽がうかびあがるのである。たぶん･････たぶん･････愛とは、黄金の芯のばらが緑の葉 鞘からすべり出るように、美しい友情から自然に、花開くものかもしれなかった。

５．やがて薄絹のとばりはふたたびおりたが、夕闇せまる小径を歩いていくアンは、前の日の夕方、はしゃいで馬車を駆っていたアンではなかった。目に見えない指によって、少女時代のページはめくられ、一人前の女性としてのページが神秘な魅力をたたえ、苦痛と喜びをのせて、アンの前にひらかれた。

６．ギルバートは賢明にもそれ以上なにも言わなかった。しかし、目に残ったあの時のアンの、みるみる赤く頬を染めた姿から、今後、４年の前途をはっきり読みとることができた。４年間の真剣な、たのしい勉学･････それからその報いとして有意義な知識をたくわえ、恋人をかちえるのだ。

７．二人のうしろには、小さな石の家が、想(おも)いにしずみながら、小暗い庭に建っていた。それはさびしくはあったが見捨てられたのではなかった。夢(ゆめ)も笑いも人生の喜びも、まだまだ、おわったのではなく、小さな石の家には未来の幾夏(いくなつ)が約束(やくそく)されていた。しばらくのあいだ、待っていればいいのだ。そして川むこうでは紫色(むらさきいろ)の静寂(せいじゃく)につつまれてこだまもまた、その時のくるのを待っていた。

P459 ～ P461

［コメント］

世界の名作、モンゴメリー著「赤毛のアン」シリーズの第 2 巻「アンの青春」。16 才で小学校の先生となり、18 才で大学へ進学するまでの 2 年間の物語。すべての人が人間として生きる上で一度はゆっくりと読むに値する名著。

― 2015 年 4 月 26 日林　明夫記―